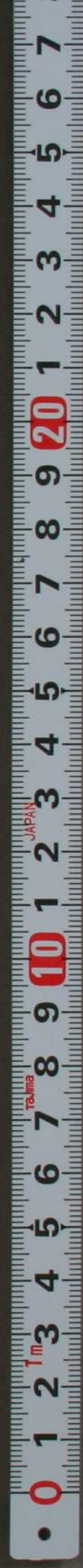


洋学文庫
文庫8
C 309
3



西洋雜記卷三

目錄

冠并トルバンドの説

ヘルマニニアの帝傳國の寶器の説

西洋諸國の名義

依蘭地の説

印度の人蛇を啖ふ説

キルキツセンの説

エツセドンの説

小人國の説



西洋雜記卷三

目一

犬馬諸獸年を経るといへども小なること

初生の時の如くならしむるの説

カンキユツト國傳統の説

アフリカ^ア亞弗利加洲^カに異類の人物ある説

モ^モ莫卧兒^ルおよび暹羅^{シヤム}の尊號の説

暹羅國の説

工鄂國^{コシ}の説

アントロホハアジ^アの説

ヘルマニ^アアル馬泥亞國の鬼城鬼塔の説

ヘ^ヘ勿^チ榻^シ祭^ア亞國の都城の説

鐵門關の説

ゲロー子^ンの説

ガツリユス河水の説

モ^モ莫可沙^ス國の説

多鼠島^ノの説

ナ^ナ那波里^リの石穴の説

ゲ井ム子エ^テンの説

不老不死の王と^ソの説

風鳥^ノの説

カナアリヤ^ノ鳥^ノの説

墨^{メキシコ}是^シ可^コ國大鴉の說

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



西洋雜記卷三

冠并「トルバント」の說

冠ハ和蘭語「コローン」といふ^{ホランダ}歐羅巴^{モウロウバ}の諸國其帝王公侯の爵は隨く冠の制各異なり。皆金銀諸寶を以て是を美飾し。以て傳國の寶となす。新主世を嗣てのち即位の礼を行ふ時ハ必其傳國の寶冠を戴きて群臣の拜賀を受く。其色を名け「ケコローン」といふ。是冠之といふ義なり。入^{セルマニア}爾馬泥亞の傳國の寶器。その第一ハカールゴロート帝所製の寶冠なりといふ。



百見西亞都兒格等諸國の人ハ皆頭ハ布を以て
 旋廻して、ちまを包みて中とちまの號して「トルバンド」と
 呼ぶ。ちまを百見西亞の人ハ「フルガツ」と呼ぶ。都兒格の帝
 の戴くちまは「トルバンド」ハ其形大にして、玉石ちまを
 飾り、三束の鷲羽を其前ハ挿む。ちま亞細亞歐羅巴
 亞弗利加の三大洲を表し、ちまのちまりといふ。馬
 哈默の子孫都兒格亞刺比亞等の地ハあるも、此ハ稱
 て「エミルス」といふ。其人ハ緑色の「トルバンド」を戴くと
 入ル馬泥亞の帝ハ傳國の寶器十二種あり、ちまを以て

井キス。インセゲニア又ケレ井ノイニといふ。其中ハ
 種ハちまを其國中拂郎菽泥亞道の子ウレムベルク城
 ハ藏め、四種ハ其物斯法畧道の「アトケン」城ハ藏む。その
 第一ハ其國中興の聖主カール。ゴロート帝の所造の
 寶冠にして、金銀を以てちまを製し、高さ一丈餘上ハ
 十字の形をたし、すゞみち明珠美玉を以て是を飾
 り、内ハ紅ちま天鷲絨を以てちまを包む。第二ハカール
 ル。ゴロート帝の環、第三ハ上世より傳ふるやちまの寶
 劍なり、明珠を以て是を飾り、銀を以て鞘とする。第四
 ガウド。レイキス。スセフテル寶器の名笏に似たり王者の把するもの物 第五

「ゴウドレイキス。アツフル」寶器の名よりして形球に似たり 上は黄金の十字あり。第六ハ寶衣あり。明珠を以て飾とあり。第七ハ昔より所傳の帝の外套とあり。第八ハ寶襪子なり。以上ハ「子ウレムベルグ」城よりあり。第九ハ美玉を以て造りたる寶箱なり。され上古の聖人より所傳の物を納む。第十ハ「カレレルゴロト」帝の寶劍。第十一ハ「徹戒」を記す。第十二ハ古の聖人所傳の經典よりして「イタメ」金字を以て記すもの。以上ハ「アーケン」城より貯るものなり。

西洋諸國の名義

西洋諸國の名。その其開基の始祖の名。あるはハラの始興の地名を以て。總國の號となすものなり。意太里亞國ハ上古の世ハ西齊里亞國王イタリウスといふ者。其地を開きて。始めて耕農の業を其土人ハ教へたるよりして。名ク。羅馬國ハその開基の始祖ロムリユスの名よりして。名ク。入ル馬泥亞の古名を「アレマニア」といひ。其の土人ハ今「フウラ」稱して「テウツセランド」といふ。其も其初王「アレマン」一名「テウトウ」といふ者の名よりして。其他和蘭の古名を「ハタアヒア」といひ。第那瑪爾加の別名を「太泥亞」といふの類。皆其始祖の名よりして稱するものなり。

梅^ト晋の時^ト河南王業延其祖の名^ヲヤ
 用^{リテ}國号^ヲ吐谷渾^ト名^ス是類^ク。其^ハ和蘭^ト莫斯哥未亞^ト
 都兒格^トスウ井ツセル^トランド^ト等^ハ其始興^ノ地^{ナリ}又^モ
 國都^ノ名^ヲ以^テ總國^ノ號^トナ^リ。其^ハ漢郡唐州^ト
 後^ニ國號^トナ^リ。其^ハ我日本^ノ總名^ヲ或大和^トとい^フ
 う^レて^モ者^ナラ^ズ。

依蘭地の説

「アイスランド」ハ氷地^トとい^フる義^{ナリ}。其島^ハ北方大洋^ニ
 中^ニあり^テ氣候^ハ極^メ寒^ク。五穀^ヲ産^セず。草^ハ
 木^ハ少^シ。土人^ハ獸皮^ヲ以^テ衣^トナ^リ。魚骨^ヲ以^テ家^ヲ
 造^ル。其地^ハ夏月^ハ絶^エ雷^ナ。冬月^ハ雷^甚多^ク。

一^ト又^モ一異事^{ナリ}。又^モ此地^ハ鼠^ナ。海船^ヲ
 携^テ此地^ニ往^テ是^ヲ試^ム。今^ハ此國^ハ第那瑪爾加^ト
 の王^ハ屬^ス。思可齊亞^トの北海^ニオルガナセ^ト諸島^ノ
 の一^ト。グムス^トあり。其地^ハ毒物^ハ毒蟲^{ナリ}。
 又^モ鼠^{ナリ}。海船^{ヨリ}至^ル鼠^モ。此島^ハ来^ルを^モ忽^チ死^ス
 す^ト。

印度の人蛇を啖ふ説

印度^ノ人^ハ好^ム蝮蛇^ヲ食^フ。他邦^ノ人^ハ鰻魚^ヲ
 食^フ。如^ク。其地^ハ一種^ノ大蛇^ヲ産^ス。名^ケ

て「ホイキユアーキユ」といふ。其長さ二丈二三尺より〜
 四五丈より〜。太さもさう〜。稱ふ好んで花多き大
 樹の上より旋廻し、野羊熊鹿の類を生吞り、國人方を設
 け〜是を捕り、さう〜以て食料とし、彼地は居るところの
 欧羅巴人も好事なる者ハ、さう〜彼を效して、おこを食
 する者あり〜といふ。

按、此大蛇又アメリカ洲に産して、テイウボツ
 と云人の「アメリカ紀行」曰、「バライバ」といふ所にて、
 予此蛇を捕り〜を見たり。長三丈餘、太さハ大
 桶の〜。淡黒色なり。おこハ其地の里人等、其

邊の野よ〜。此蛇の野羊を吞を見て、すな〜
 袖筒十三を〜。其蛇の頭を碎きて、是を
 得〜。其野羊蛇の腹を裂て出〜。此蛇ハ他
 の蛇より〜毒なり。故に里人ハ〜及〜
 「ホルトガル」阿蘭陀の人も其肉を食〜
 「エツセドンの説

ま〜「韃靼部中」シケイチの邊に一國あり、「エツセトン」
 といふ。其國都もま〜「エツセトン」といふ。其俗父母至親死
 すれば、則相聚りて其屍を食ひ盡〜。其頭を雷めて、
 其上に金を貼〜。是を貯へて以〜神と稱〜。毎歳一

たじ是を奈もといふ。

小人國の説

和蘭語よ小人を謂て「テウエルゲン」といふ。プリニウス
 の書小曰小人國ハ東方印度の深山の中よありと云ふ
 スタフボ人の書よハ、アフリカ亞弗利加洲の邊境よ地よありて
 其説よいもく小人國其人形軀甚短小よして長僅よ
 一「エルレン」エルレンハ此方の曲ハ尺二尺二寸四分餘よ過ぎんハ歳をもつて老
 とすなり其婦人一産うまふて五子を生むその孕むれ
 間ハ僅よ三月よすぎん鶴鳥時よして其人を吞食
 ふ故よ小人相聚りて恒よ鶴と戦争れ子を生むとす

ハ洞穴の中よ隠き居て以て鶴を避くといふ又アリストラ
 レス人の名の説よハ小人國ハまゝ泥祿河アフリカ洲の大河の近傍よ
 ありといふけごハ其詳あるもハ知るべうといふ
 又思可コ齊シ亞ア國の属「ウエステルセ」諸島の中よありて一島
 ありて稱して小人島といふ此地よ於て地を掘りて其深
 底よて小人の遺骨全く存するものを掘得るを多し
 盖此島昔時ハ小人ありて居りてとあり知るべうといふ
 故ようくの如く小人島と名くといふ
 今小人國と稱するもの凡三地あり其一ハ「サモエデン」サモエデン
 ありて莫斯哥ゴ未ビ亞ア北邊海よ傍よの地よして其北ツアイ

カツト」といへる海峡を以てイハセンブラ新增白臘の地と對し其人
 形軀甚短小にして乾魚および蜜を以て糧となす。今
 ハ莫斯哥未亞より是を治め其人は教を施し其二は
イハセンブラ新增白臘なり。其地北海の中よりあり。其人まづ形軀
 短小にして所居の室屋まづ是を稱ふ身は海獸の皮
 および鳥羽を披く衣となす。日月を神となす。是は
 祈禳は其三ハスタラート。ダアヒスグレルウラフなり。是臥兎狼徳
 の西海の濱にしてアメリカ洲のヤメス。エイランド
 といへる大島と對する地なり。其人もまづ形軀短小
 して皮を以て衣となす。ちよを見りて容易は其男女は

辨識するをうへに身體の色素ハはあまぞ白くといへり。
 魚脂を塗るが故に其色恒に甚赤黒たりといふ。

犬馬諸獸年を経るといへども小なる者
 初生の時の如くならしむるの説

クエツデマンが奇方秘函に曰「ヨードン上卷はリッパとて古
 の馬保アブラハム。ラサケストといへる人うづつて如徳亞人の子孫礼勿泥
 亜國の界におひく其地のレキツ。ゲレエルド官名とるの
 の子の厄小逢うるを救ひしとあり。是よりより謝す
 るよ一疋の甚小なる馬を贈り且その奇術を教ふ其
 は馬犬猫等および其他の諸獸皆あへて長大ならしむ

して、小なるものを初生の時の如くならしむるの法なり。此時彼処より見ると、たゞ馬のみならず、そのレキツ、ゲレエルデの婦の畜ふやちろの、一の極め、矮小なる犬あり。是も此法を以て是の如くならしむるものなり。其法、犬馬諸獸生むる數日を経、眼始めて開く此時、於て、焼酎すゝむるなり。小麦の粉、并に紅珊瑚のよく擣きて細末し、こぼすの、四支杖以て、是を餌としたり。則ち此獸壽ハよく其天年を保つべし。形の小なるものハ其初生の時は異なるべし。其法ハ容易なり。事ハ太奇なり。以て玩物、具ふべし。

「カンギユツト」國傳統の説

南印度「カンギユツト」國ハ、安日河ガングスの流に近く、此地稍大なる國人、其主を稱して「サモシリ」といふ。是土地の神といへる義なるを、此國主の世ニ傳統の例かちらば、其姉妹の子を立て、位を嗣がしめて、其王の至親子弟ハ、あへてその統を嗣ぐことを得ば、いふまでも一大異事なり。

「アフリカ」亞弗利加洲ハ異類の人物あり説

アフリカ 亞弗利加洲ハ地勢三角をなす。其大なるを「欧羅巴」倍り、其邊海の諸國ハ、地みよち多し。豊饒ありといへど

も其内地ハ赤き及して氣候酷熱^{コウ}にして水泉絶^トく少
 なく曠原荒沙ヤもすれば數百里^リも亘^ワり猛獸鷲鳥
 毒蟲等極めて多く他邦の人跡至り^ラざらぬの地也
 一。地氣^{チキ}うくの如く極め^クて偏^{ヘン}なるが故も其人物風
 俗甚殊異^シにして絶えて人類^ニ非^ズざるもの有り或
 初て子を生め^ル必^ズち^キを食ふ^ルち^キを以^テて多子を生
 む^ル吉利^{ナリ}なりとす^ルものあり或衆數萬^ヲを聚め^ル
 恒^ニ遷移^シして居^ルを定め^ズ至^ルの地毎^ニ小^シ其人民鳥
 獸蟲類^ハ至^ルるまで悉^ク啖^クハ盡^スして其地の生命^ヲをな
 してのち^ハ他方^ニ遷^ルる者^{アリ}有り或其人聲音^ヲ擧^ゲ動^ス

べ^ク犬^ノ同じ^キ者^{アリ}或^ハ此胸上^ニ眼^{アリ}ある者^モ有^リ
 りといふ^ハち^シらの事^ハ二三百年来西洋^ニ波^ル杜^ル尾^ル
 國^ノ人其内地^ニ邊^ニ通^シ高^シて傳聞^スする^ハと^クなり
 又其海邊絶海^ノ地^ハ一國^{アリ}エジ^パンス^トと名^ク其人
 とな^ル人身半足^{アリ}裸^ラ體^ニを^テ走^ルる^ハ甚速^{ナリ}又
 一國^{アリ}アル^ビノ^スとい^フ其國^ノ四面^ハ皆^ニ黒^ク人の地^ナ
 りといふ^ハ特^ニ此國人^ハ其色^ミ甚^ニ灰^白にして^テ恰^ニ死^ス
 人の色^ノ如^ク絶^エて生^ル人の色^ニ似^テる^ハ故^ニ近傍諸國
 の人^トな^ルを^テ稱^スて^ハ鬼魅^トと^シ敢^テ相^ニ通^スず^ルと^クなり
 といふ

莫卧兒モゴルの暹羅シヤムの尊號の說

大莫卧兒國本名「モゴリスタン」といふ其始祖タメルラン
 撒馬兒罕國サマルカンドより業を興して天竺諸國を破滅し今印
 度第一の王者なり「モゴル」ハ即其國主の尊號なりて
 アジア洲中よ於て金銀寶玉明珠諸珍寶よ富める
 事最第一なりて兵威強盛ある至尊大君といへる義
 ありて「暹羅」の國主その名號を其國の方言小
 て稱するところ甚長し是亦尊號なりて是を義譯
 すとバ天より保護するところの神聖の尊體をりて
 暹羅の大國を治め「ユデア」上都よ居て兵威無雙なり

て一百の王族を服從し金冠の寶位よ昇て黄金美玉
 の宮殿よ座し百玲萬寶を擁するの義ありといふ按
 唐土漢の時の匈奴の表し天地所立日月所照匈奴大
 單于と稱し隋の時の突厥の表し自天生大突厥天下
 聖賢天子と稱するの類なりて且寶物を以て尊號とい
 ることまことに奇事なり

暹羅國の說

暹羅國其地安日河の東よあり南ハ北極の出地十度
 起りて北ハ十八度よ至る其周廻凡五百餘里日本の一支部
 の西南諸蠻の内よ於て其地最大なり隣傍の真臘カホチ

マラカ 滿刺加マラカは是は臣服し國內分て十一道とて其國都
 を「エテア」といふ又オデア是は其の國王所居し其宮
 殿の制度甚美麗都内の人家凡四十餘萬王之親衛の精
 兵恒は五萬人を備ふ凡此國近世兵威甚盛しして事ある
 て兵を召すとてハ暫時の間はよく大軍を出し王出ると
 きハ屋を象は駕して幔幕を設く大臣諸將象は駕し
 て是は後ふ者多し兵器ハ銃砲弓矢刀鎗種ニ全備ハ
 水戦ハ王の大船ハ美麗ある幔をもつて是を飾り
 諸の戦艦是を圍繞隨後し夥く砲を設けて外面は
 備ふ恒は兵を用ひ其隣傍の阿瓦亞刺敢アハ琵琶牛ベガウヤ

ニゴマニゴマ等諸國を征して多くハ勝利あり諸國皆是を
 怖る國中すべく佛法を崇信すその寺觀佛像教法
 等すべく多くハ亞刺敢國アハと相同し其人色多くハ黃黑
 衣服の制す他の印度は類す人家屋室の制多くハ
 大竹を用ひ椰子樹の葉を以て屋を覆ふ國人皆妻妾何
 り其妻たる者ハ皆その門戸相對の家より迎ふる者
 して貞静を主とし妾たる者ハ皆賣鬻バイシクするの賤人
 女子ハ相對の家は嫁り妾の生むとる子ハ其家を嗣カハリ
 となり富人ハ或ハ些少の家私を分ち田宅を何とあり

何れ大抵その風俗和怡魯鈍なりといへども其内智慧
 ありもの。またよく文學諸藝地理航海商賈等の業を
 能すといふ。寛永中、播州の人宗心と云ふもの。再此國へ
 渡海し、其宗心が話を書し、その渡天物語といふ書一卷
 宗心ハ世より天竺徳兵衛といふものなり。此書宗心がみづから記せ
 るはあらば、空永四年。或人宗心が談話するところを記すものなり。
 此時宗心年ハ十九歳といふ。其書中、記すとあるは、風俗物産の類ハ、さ
 りとるべし。地理古跡等を記すとあるハ、極めて疑
 ぶべくして、信ずるは足らば。其宗心書中、云、某地ハ達磨出生の
 某の佛寺ハ須達長者の遺址なりと云ふ。疑ふべし。又云、ウリ
 ニスウといふ城あり。此處昔空海と文殊と智慧論せし所なりといふ。此
 説などハ何の證據あるところや。凡昔よりして日本の諸僧渡天せしと
 いふハ皆偽なり。さういふ渡唐して學問をたしむるもの。日本は歸りてのち、

我ハ渡天しりたるをいして、人を欺れ信ぜしめたるなり。いはんや
 空海ハ唐土よりハ名譽をたらし、その人なきも、渡天の事ハ空海自
 作の諸書并たしりたる。實録ハなき。然し、其宗心が携へ
 来りし、貝多葉ハ文字を記せしもの。浪華の蒹葭堂
 および東都の本田氏各一葉を藏れ、並暹羅國の文
 字ちりしといふ。細針の如き物を以て葉上ハ刻畫し
 たる者なり。世より此貝多葉ハ色別物もたらば、椰子
 の葉より、それ辨蘭畹摘芳中ハ詳なり。

工鄂國の說

工鄂ハ亞弗利加洲西海濱の大國よりて古より政羅
 巴を通せず。西洋中興第一千四百八十四年、日本文明十
六年 唐土明
 の成化二十年、小波爾杜瓦爾國王ヨハン子ス第二世の王の
 甲辰にあつた。

時よ何れりて其國人ヤーコツフ。カニスとソふ者始め
 て此地よソふ。其國東ハ亞毘心域國よソふり。西ハ大洋
 よもソふ。南ハ馬拿莫太巴もソふ。喝叭布刺よ接ハ北ハ
 為匿亞の諸部よ界して中よ「ロアング」安卧辣エ鄂ゴ
 イ「ハツタ」斑我ツンタ崩罷「ペンバ」等の諸國を分つ。
 其地すべく川流多く土地肥沃りて夥く香椽橘柚
 の類を産れ又多く椰子を出し是を以て搾りて酒を
 釀れす。其「レリユンテ」とソふ河水の邊よりソふ。シ
 ト。サルハドルの地よ且るまでの間ハ則獨鹿樹堅木の名及種
 ニ佳菓をむすぶの樹満列れ和蘭の人多くハ此地より

〜香桂を得る。此地所産の象ハ他國の産小比
 すきハ最大なり。一牙の重さ二百ポンド一ポンドハ九十六ネ又エウ
 チー「ンジー」とソふ鳥あり其皮甚貴し。王侯の外ハ服と
 あす。何れも其人多くハ黒色なる。奴皮ニヒ亞アよ
 比ゴイ為子匿亞等の人よ比すきバ尤黒くして且醜し。其性
 和怡りて外邦人遠くソふ者あきむ。皆よく是を
 礼待れ身軀柔弱り。力少し。歐羅巴の人一を以
 て其十よ當るよ足る。俗錢貨を用ふるを知らぬ。小
 した金銀のつらと鍊チらざる塊クワイをもつ。物よ交易す。酋
 長貴人ハ頭小方巾を戴れ孔雀或駝鳥の羽を以て飾

となれ其上體ハ裸身ありて鎖の如きものを着りて胸背をつつむ兵器ハ唯弓矢短劍のみたましく小銃を用ゐるものとあり。鎧ハ樹皮および水牛皮のなり其國王を號し馬泥といふもの馬泥工鄂「マニ・ハムマ」「マニ・マンバンダ」等の號あり。波尔杜瓦爾國人も至りてより地を開き衆を植くる。此諸地は「ロアンダ」「シント・パウロ」等の地小城郭を築き酋帥を署し又その安卧辣國王を擒りて千六百六十七年より其を里西波亞^{波尔杜瓦爾の都}に送り其地の銀鑛を開く。僧官を遣はして政教を施し此諸國の人今大半其教に帰服すといふ。

「アントロ・ポハージイ」の説

上古の世は「ギリキス」國の中は一種の人肉を食ふの國あり。是を「アントロ・ポハージイ」と稱せしむ。今「アントロ・ポハージイ」と稱するの地ハ亞弗利加洲の中ハ「曷ハ布刺贊西拔尔」等の海邊の地及び「マロコ」國等の内ハ「マサク」あり。亞墨利加洲ハ「ハ伯西兒」および「デルラマゲツランカ」の部内も「マサク」ありて皆人肉を食するの徒なり。近世より「伊斯把你亞」國等の人多く「マサク」の地より入りて教化を教へて悪俗やうく改むるべし。其内地絶遠の処ありて

尚いまた其化流行するよりさういふ

入ル馬泥亜國の鬼城鬼塔の說

入ル馬泥亜國「子デルハルツ」の地は高山あり。「クエエトリ
ンビュルグ」といふ城を去る一里なり。此山上は長
を垣あり。あつちの城を建たるは似たり。皆大石を
つめて砌成して造築をたゞる奇巧なり。此所ハ山道
きまめて峻阻艱難して絶えなく人工をいふべき所の所
よりならず。傳へいふ古の時小鬼神の造建するところなり。
故よ名りて「ドイフルス。ミュウル」といふ。ドイフルスハ鬼魔ふ
又同國中窩失突利亞の内なる。大掣比といふ大河

の曲流するところの。高き岩石の上頂は奇巧なる高塔
あり。上層は蓋なり。ちよむり「ウエルツビルク」地名乃
僧官ブリユクといふ人の徳を感じて鬼神ちよむを造
る。故よ名けて「ドイフルス。トールン」といふ。

勿榻奈亞國の都城の說

勿榻奈亞ハ意太里亞國の中より東北邊の一國なり。
世及せざる自立の主あり。是を治む。ちよ皆國中其
世家の中より一の最功德ある者を推して主となん
るのちより。其都城も又勿榻奈亞一名「ヘニセ」と名く。ち
よ「ラギユサ」といふ湖なる。湖中よりあり。此湖中よ

七十二のちたすもづいなる島ありよよりそ是
は據く木を椿となく城を水中に建つそ此周廻凡
八里城中の街衢皆島上は在るがゆゑは其幅多く狭
五百餘処は美麗なる橋を通じて以て往来は便に城
中すべし水たすもづいなる國人船を造るも甚巧なり
其最大なる橋を「イルポンテ。アルテ」と名く悉「マルメル
の石を以て造建し橋上の両邊は美麗なる人家
を建列し其橋甚高くして大小の風帆恒に橋下を過
ぐ此城中は美麗なる宮殿一百五十餘処七十の大寺
觀三十九の男子の説教処二十八の婦人の説教処十八

の大神祠十七の大なる養病院一百十五の高臺五十三
の大小互市場五十八の飛泉湧水百六十四処は「マルメル
石を以て造る古人の巨像二十三処は金銅の類を以
て造る巨像ありあり

鐵門關の説

亞細亞洲日阿爾日亞國は名譽の城地あり「テルベント」
と名く北高海を離るも凡三百餘歩其城一の山上に
在り要害をめぐりて堅固に地勢狭長なりて道路
險阻あり百見西亞等の諸國より北方諸國は往来
する諸方咽喉の要路なり初八百見西亞國の王あり

と有^{タモ}ち^リと^リと千七百二十二年日本の享保七年、唐土清の康熙六十一年、壬寅は
 莫斯哥^{ムスコ}未^ス亞^ビ國^アの伯多^{パト}球^{トル}第一世の帝、兵を遣を
 して^リち^キを奪^ヒ取^リて、守を置^クて是を治む。此地を
 都兒^{トル}格^コ國^クの人ハ呼ん^ド「テミルカジ」といふ。是鐵門とい
 る義よりして、其要害堅固なること、世はさ^ラず^クと^スる^ルものよ
 り^ク名^クる^ル者^ナら^シり^トい^フ。按^ズ明^セは刻^スる^ルこと^ラら^シり
 萬國の圖に北高海の邊は鐵門關あり、す^テ元^ノ太
 祖西域諸國を破滅して、西の方鐵門關に至^リて還
 る^ルも、諸書に見え^ズり^ト思^フは、此地ならん^ト尚^ホ考^ヘべ
 し。す^テ亞^ラ比^ビ亞^ア國^クの人ハ此地を稱^スる^ルハツ^プ。アル

。アビユアブ^トといふ、是ハ諸門關中の關といふ義よりして、
 ま^タ其堅固を贊するの義たりといふ。

「ゲロー子^シ」の説

韃^{タル}靼^{タリヤ}部中の是^シ的^チ亞^ヤ國^クの歐羅巴^{ユーロパ}は近き所は一國あり、
 名^ナを^シ「ゲロー子^シ」といふ、其人みな身體は塗る^ル種
 二の彩色を以てす、其形負^ガき^タめて奇怪^ナり^トて、怕^ホ
 べ^ク。馬乳は血をま^シり^テ食^フふ、是を最上の美
 味とい^フ。人皆武を好^ム、小事^ナら^ズば^シ争^ハ戦^ハん、
 大仇^{キウ}を獲^ケむ^{コト}なら^ズば^シ其皮を剥^カぎ^テ已^ガ身^ヲ纏^マふ
 て衣^トなり^トて、以^テ其功を表^シる^ルといふ。

ガツリュス河水の説

小亞細亞^{アヒアミナル}フレイジア^{アヒアミナル}此地は河水ありガツリュス^{アヒアミナル}とち
づく其源ハケレニス^{アヒアミナル}と云ふ大山より下りて流れて
ニブル^{アヒアミナル}と云ふ大河に合流此ガツリュス^{アヒアミナル}の水其味極め
て甘美^{アヒアミナル}にして是を飲めば人を酔^{アヒアミナル}とせしめく身體を
快暢^{アヒアミナル}し腦^{アヒアミナル}を清潔^{アヒアミナル}しすはくさ^{アヒアミナル}を以て衰弱の症^{アヒアミナル}
用みく甚功ありと云ふ

莫可沙國の説

北亞墨利加洲^{ノルドアメリカ}の新渚^{ニューハアニゲ}厄利亞國^{アリヤ}の邊は一種の夷狄あ
り號して莫可沙^{モッコサ}と云ふ其人皆野獸の皮を以て衣とな

す其形状甚怖るべし性質きためく強暴野鄙^{コウボウヤビ}にして皆
盜賊^{コウサツ}を以て業とし故に他邦の人皆その寇掠^{コウリヤク}を怖と
く其廢暴無智なるを察し恒に計を設けく^{アタカス}其色を
破^{ナク}逐^{ナク}り然^{ナク}く其部中皆盜を以て業とすといふ
又法ありく其骨肉長者の物を盗むとを禁^{ナク}び若是
を犯すもの^{ナク}らば則是を捕へく生^{ナク}なごら土中^{ナク}に埋
むといふ

多鼠島の説

亞弗利加洲^{アフリカ}聖老楞佐島^{セントラウレンス}の邊は一島ありマウリツ^{マウリツ}
と云ふ此地島木を出^{ナク}すことなごら多^{ナク}し故に喜望峯^{ホウテントウ}と

鎮する和蘭の人其所領の地の野人を遣わして其木を
斫り取らむ此島氣候融和して絶えて毒物たり
然るも満島皆鼠にして其多きと計ふるは勝る
らびと云ふ

ゲ井ム子エテンの説

黒地兀皮亜の中は一種の國あり黒地兀皮亜ハアフリカ洲の黒人諸國と云ゲ井
ム子エテニと名く其人皆裸體にして衣を著ることを知ら
ず常は弓矢を挾み猛獸を射し其肉を食ふ水澤の間
は洞穴を鑿ちて是に居るその水を飲みおぼは浴す
且穴中よりして居る獸を射るは便り然るも此地

虎豹猛獸を多きを以て睡眠の時はおぼは咬み食
ちしんを畏る故に夜に至ると皆大樹の上より臥して
其害を避くといふ

不老不死の王といふ説

拂郎察國ハ歐羅巴洲中の最有名の大王国にして
地もはる甚大なり皆一王の有る属す國中分ちて
十二道となり皆守令を置く其太祖フランコスといふ
者ガツリア國に代りて國を建てのち其王サリス
聖徳ありて悉國法を定め國人其徳に服しおぼ
より其王子孫相嗣し専天に代りて民を救ふと

以て務となり。國勢日よ盛りて。近傍諸國多くたきよ
歸化し。今よ至るまで。凡一千四百年。國法礼きぎ
て。たえく禍札たり。國富々物饒まさり。人々其業を
樂しむ。故よ世よ此國王を賛稱し。長生不老不死の
君としよとあそ。

近年勃那把尔帝の大札あり。此書古の以前の説より。

風鳥の説

俗より風鳥ハ南懷仁が坤輿外記よ。無對鳥よ作る。和
蘭語よてハ「ハラテイス。ホーゴル」とし。西書よ所載の
説。盤水先生の蘭畹摘芳中す。譯文ありしと。

今又ボイスの書ハ所載の説を得て。左よ記す。

ボイスが所撰の學藝全書よ曰。ハラテイス。ホーゴル和蘭

語「ホーゴル」ハ鳥なり。ヒフ子ルス及びウライツの書よハ「ハラデ井ス」ハ
此鳥昔ハ「トルコ」の属。ハラデ井スの地より産れと思ひてうくのて。こま
名く「トマ」ハ「ハレーン」テインの書よハ「ハラデ井ス」ハ太虚なり。此鳥太虚
の中を飛翔して地よ下るを「トマ」トあきよ。よりて名く「トマ」ハ「蘭畹
摘芳」よ一名「マニニコ」チアタ。又名「アヒュス」ハラチシアカと
し。者ハ一種の奇鳥なり。其羽毛華彩繁爛サンランなる者

なり。此鳥其羽毛翅翼を具ふる。こま。他鳥とは甚別
なり。以てんとなき。ハその胸より。甚長き羽を生
て。尾より。長く。且廣き。故なり。此鳥大抵す。尾
其尾翹テの所より。二條の長尾糸の如く。毛を生

して其色黒く羽とハ異なりて且全身の羽よりハばな
まど長し眼ハ其頭の諸部より比すべきハ甚小く喙ハ細く
瘦てあるカハ鶴鴿の喙に似たり窮理の諸學家及
び諸の此鳥を産するの地方は旅行せる人の説ハ此鳥ハ
此鳥ハ數種有りといひりライといふ人の説ハ此鳥ハ鷲
鳥の一種なりて其小なる者なりといひり此鳥のま
世ハ所傳の誤説數條あり或は此鳥ハ氣を服
す教のまゝなりて別ハ飲食する事なく又其足なく
空中に飛翔してあへて地に下る事なく故は其の或
年老い又ハ病よりておのづから死して地に落つるも

のや拾ひ得るの事なりと又あるハ曰此鳥ハ曲アテ其
尖利なる爪ハ故ハ鳩等の諸小鳥を追て是を捕へ攫
て裂きて是を食ふ其状猶他の鷲鳥ハ異なり然も
いささかハ皆虚説なり信ずべからず凡そ此鳥ハ高
樹のよりより飛翔するなり其輕捷なる事あり
ハ燕に同し故ハ印度の人ハ此鳥を名々呼びて「テルナ
アテ」の燕といふ事その「テルナアテ」の地は多く此鳥
を産する故なり又ヘルヒジウスといふ人の説ハ此鳥
鳥ハ此印度地方の最南諸地に出づといふ
島の一 キュリウスシウスといふ人の説ハ此鳥を定めて大
小馬路古五

小の二種とす。其大なる者ハ「アルウ」の諸島に出現するもの
 ありて彩色最美麗。尾翫ゴイマアより〜の長毛あり。又
 其小なるものハ「巴布亞礼新為匿亞等」の諸地に産す
 るものありて。大なる者。比すきバ美麗ならん。且尾
 翫の長毛たうく。羽毛の色白く〜。且黄を帯び〜。
 凡此の大小二種の鳥とす。其中に鳥王あり。それ形他
 の鳥よりハ小なり。其飛ぶと最高きと〜。是を
 辨別し。其羽毛最光彩あり。それ尾の小なる〜。是を
 り〜。又二の長た羽を生じ。他の鳥ハ〜。此鳥王は後
 ひ〜飛ぶ。集るの時〜。亦是を以て〜識別す。

その上又馬尾に似たる毛あり。末の所より一束となす。毛
 何つ〜。旋廻モシクワイ〜。最末より〜。毛彩何る羽のぶ
 〜なるなり。

此鳥モウロツク歐羅巴洲地方に好事家甚多きと貴重なり。馬路古
 地方においてハ此鳥を呼て「マニコヂアタ」といふ。アルド
 ロハンチユスといふ人の説は〜。是神鳥といふ。義あり
 と。然るも其神鳥と名けたるゆゑ〜。詳あらん。
 凡此鳥。その大なる者ハ身の大きハ大抵鳩の〜。
 て。翅ハ赤色なり。ヘルヒジウスといふ人の説は曰。此鳥は
 産する彼炎熱ある地方。常は陰雨多きの候は〜。

九箇月の間ハ此鳥の羽毛脱落する多ク然ル^{モウ}歐
 羅巴の八月の候より^{ロバ}之を^{ガツラク}則其雛を生育す其の時ハ
 至リ^{ナホ}羽毛再生ト^{ワガ}然^{エウ}其鳥王と^{ロバ}ソウ^パの^ハ後ハ
 集^{ナホ}猶我歐羅巴の^{エウ}スプレ^{ロバ}エウ^パエ^ハエン^ハと^ハソウ^ハ鳥^ハハ
 似^ハソウ^ハ此鳥恒^ハ止宿す^ハ其^ハソウ^ハハ^ハ揺動す^ハ其^ハソウ^ハハ^ハ高
 大なる^ハ樹上^ハナリ^ハ日夕^ハソウ^ハ色^ハバ^ハ諸鳥相率^ハソウ^ハ一^ハ処^ハ
 あつ^ハ其鳥王の側を^ハ避け^ハ次第^ハを^ハ逐^ハ其^ハソウ^ハハ^ハ宿^ハ
 それ食^ハとする^ハと^ハソウ^ハハ^ハ一種^ハの^ハ甚^ハ高^ハて^ハ枝^ハ多
 大樹^ハ生^ハす^ハ赤^ハ色^ハなる^ハ小^ハ菓^ハ實^ハなり^ハ人^ハ其^ハの^ハ恒^ハ止^ハ宿
 する^ハと^ハソウ^ハハ^ハの^ハ樹^ハを^ハ認め^ハ其^ハ枝^ハ上^ハの^ハ小^ハ窩^ハ巢^ハと^ハソウ^ハハ^ハへ

多くの小穴を外面に穿ちて^{ウカ}シ^ハう^ハう^ハは^ハ其中^ハの^ハう^ハう^ハ居^ハて
 其鳥の樹上^ハに^ハあ^ハつ^ハて^ハ止^ハ宿^ハす^ハを^ハ待^ハち^ハて^ハあ^ハつ^ハて^ハ近^ハづ
 き^ハ蘆^ハ管^ハを^ハ造^ハり^ハて^ハ小^ハ箭^ハを^ハ射^ハす^ハ是^ハを^ハ射^ハ殺^ハす^ハり^ハ
 其鳥王^ハを^ハ射^ハ落^ハす^ハと^ハハ^ハ諸^ハ鳥^ハ其^ハを^ハ見^ハて^ハあ^ハつ^ハて^ハ動^ハき^ハ飛^ハ
 ぶ^ハ人^ハは^ハ射^ハら^ハる^ハを^ハ任^ハせ^ハて^ハ悉^ハ地^ハ上^ハに^ハ落^ハつ^ハて^ハあ^ハつ^ハて^ハ刺^ハ
 此鳥の腹^ハを^ハ割^ハれ^ハ一^ハ箇^ハの^ハ鉄^ハ器^ハを^ハ焼^ハき^ハて^ハ腹^ハ中^ハに^ハ刺^ハ
 入^ハり^ハて^ハ其^ハ臓^ハ腑^ハを^ハ肉^ハ等^ハを^ハ除^ハけ^ハ去^ハり^ハて^ハあ^ハつ^ハて^ハ烟^ハ窓^ハの^ハ
 上^ハに^ハ懸^ハけ^ハ乾^ハす^ハて^ハの^ハち^ハは^ハ商^ハ賈^ハの^ハ徒^ハに^ハ鬻^ハぐ^ハ是^ハを^ハ號^ハ
 して^ハビ^ハユ^ハラン^ハグ^ハハ^ハリ^ハユ^ハウ^ハと^ハソウ^ハハ^ハ然^ハる^ハに^ハ波^ハル^ハ杜^ハ尾^ハ見^ハ國^ハの^ハ人^ハ
 ハ^ハ此^ハ鳥^ハを^ハ名^ハを^ハて^ハ日^ハ鳥^ハと^ハソウ^ハハ^ハなり^ハ

巴布亞私島の土人ハ此鳥の黒色なるものを捕へ獲く。其足もよび翅を截り去りて、あまをひろぎ、其羽を束ねあはせ、修飾して、其所用の中の頂よあまを戴くもの。此種の鳥ハ其羽美なる黒色あり、且紫色透明、其間ハ金色ありて甚光彩あるもの雜り、其尾翮ハゆるく青緑赤等諸色をまじりて、甚光澤あり。

凡此鳥の羽毛の色種ニ甚多シ。故ニ諸家の圖画するところ、其形色殊別なり。一ならず、今詳よあまをいづつめ考ふるハ、其頭の色美麗なりて種ニたり、あるハ頭の色諸種相雜多しとあり。然して其大なる者ハその

色最美なりて、透明光澤あり。其頭すべて赤きものにて、稀なりとす。其他ハ青色緑色黒色黄色金色柑子色等種ニあり。大抵その頭及領の上面ハ黄なりて、その咽らびハ緑色。其背らびハ赤を帯びて、赭栗色なり。其羽長くして是を掩ふ。此羽の長くきく、その尖末ハ灰白色白色黄色黄赤等を帯び、此諸色の羽聚りて一束となりて、色ハ又諸種混合す。故ニ美觀とす。

此鳥其雌雄を分別するの法ハ他なり。其喙と尾骨より生ずるの長毛とハ赤色なり、あまを以て識るなり。

カナアリア鳥の説

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事曰カナアリーホーブルカナアリアカナアリアカナアリア西海中ありて其島大小十二ありカナアリアハその
 總名なり一名デリユキフ。エイランデニソハ漢は福島トソハミナリ
 皆イスパニア國の王に屬レ一名セリン。テカナアリートソハ此鳥その
 始めハカナアリア島より産レ故ヨクのどくヨクヨク
 其形ヂステルピンキチステルピンキハ一種の小鳥なりニ甚相似チステルピンキハ一種の小鳥なりトシテ
 羽毛美シク色種ニありチステルピンキハ一種の小鳥なり轉聲美ナリ。巢を高樹の上
 作ル。ヂステルハアサミ薊ナリ。此鳥好んで赤薊を食フ故
 此の如クヨ名ク其腹ハ多クハ黄シクテ灰白色をチド
 又此鳥其色白キもの及び尚其外種ニの色をチド

あり羽毛綺麗シク轉聲美ナリ其聲佳ナリトシテ
 のとバ笛等の樂器をヨク法をヨクチステルピンキハ一種の小鳥なりトシテ
 遂ニヨク其聲を佳ニスチステルピンキハ一種の小鳥なり今ハ此鳥入ル瑪
 泥亞國ホルランド和蘭國モロッコおよび其他歐羅巴洲中の諸國ハ皆多
 く是を産レチステルピンキハ一種の小鳥なり此鳥の雌ハチステルピンキハ一種の小鳥なりトシテ
 其上見ヤ見ヤト交リテチステルピンキハ一種の小鳥なり雛を生ズチステルピンキハ一種の小鳥なりその第三度めチステルピンキハ一種の小鳥なり生ズ
 雛ハその頭ハヂステル。ピンキチステルピンキハ一種の小鳥なりの如クシテ體ハカナ
 アリヤ鳥の如クチステルピンキハ一種の小鳥なり其轉聲ハアハチステルピンキハ一種の小鳥なりトシテ
 凡此鳥雛を生まんとするの候ヨクハ蟻の卵を
 餌とトシテ又或麻の實の類を食チステルピンキハ一種の小鳥なりトシテ又此鳥

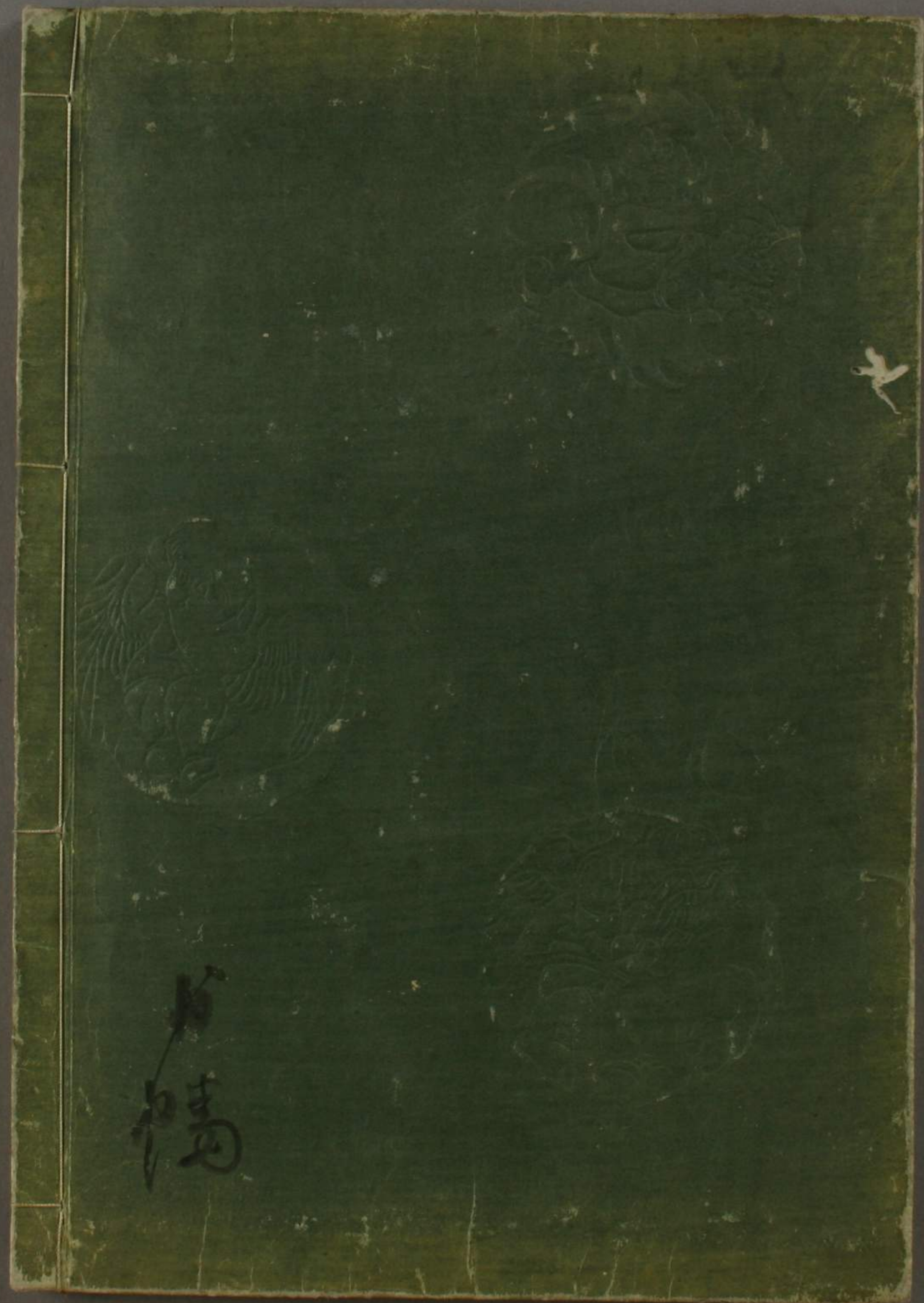
病ありて、頭は腫物生ずるといふ。雌雞の脂を塗る處
 一、ふふへ其腫物熟して潰瘍するとして、すべ彼脂を塗る
 く久く塗りて、遂はよく愈むを治すなり。又或此鳥の
 羽毛は貴つくとあり、あれ時ハ氏の種を何れも、毎日二三
 度づ、酒を以て其羽毛を煮め、和げ、日光のあたる
 所はあつて、凡此鳥は雄なるも、此ハ雌は比すも、
 身體細長あり、尾長く、轉聲最美なり。

墨是可國大鴉の説

北亞墨利加洲墨是可の地は、一種の鴉を産ひ、これを名
 ぞく「アウラ」又「カツリナス」たり。其大さあり、驚

の如し土人は「トロピロチ」と名く、此鴉色黒く、其喙
 ハすちぶる鸚鵡に似たり。新イスパニヤ國中、あつてハ
 恒に見ると、ちつたりなり。多く其巢を大樹、あるハ岩石の
 間、造る。其雛生むと、始めハ白く、長ずると、後して黒
 色に變び、其飛ぶと甚高し。其心臟を採り、日よ乾
 らば、其香氣甚強し。其肉ハ痘瘡に用いて、甚效あり
 たり。

西洋雜記卷三終



書
卷